

東京バッハ合唱団 月報

[第740号] 2024年2月号 [HP用改定版]

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.740

February 2024

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

エッセイ 🍌 今の時代に合ったバッハ像とは!?

園田 順子 (音楽学・博士、ワイマール在住)

2023年は私にとっては、パンデミックが始まって以来、数年ぶりの日本帰国が叶った幸運な年となりました。まずは日本でご縁のあった方々との素晴らしい出会いや、その有意義な日々から感謝を申し上げます。

その後ドイツに戻ってから、キリスト降誕を待ち望む4週間のアドヴェントがやって来て、町はクリスマス・マーケットで輝き、それから24、25日のクリスマスのハイライトを迎え、今は年末年始となりました。個人的には、ドイツに住んでいる中で、今が最も日本との文化の違いを感じる時期ではないかと思えます。

というのも、ドイツでは12月25日の後もクリスマスの期間は続きます。ということで、26日にはイエスの降誕場面を描写した模型(写真右下)を隣のエアフルトまで見に行ってきました。写真左はその模型とは少し離れたところに配置された、イエスの誕生の知らせを聞いてやって来る3人の賢者たち。彼らが1月6日に星に導かれてイエスに辿り着いたところで、やっとクリスマスの期間は終わります。そういうわけで、バッハの《クリスマス・オラトリオ》が6部作になっているのは、このように長いクリスマスの期間(日本の年末年始にあたる)に渡って、演奏されたものだからなんですよ。

ところで、私が最も気に入った模型というと、知り合いの家に飾ってあった写真右上のものです。家があった羊をとりあえず全て集めてみたと思いましたが、羊たちがなんとも「多様」に見えませんか? どうやら白色の羊たちの中に、犬までもが紛れ込んでいるような気もいたしますが……、知り合いはもちろん、これも羊だと言い張っていました(笑)。

羊か犬に見えるかの話はさておき(笑)、私が今、取り組んでおりますバッハ研究も、実はこうした「多様性」というテーマに関係しています。

☆

世の中ではここ数年 ChatGPT などの技術革新が話題を呼んでおり、私も様々な産業分野での活用に関心や期待を抱いています。その一方で人文科学系の学問は、人間の多様性の面に、よりフォーカスする方向性に進んでいっていると思います。これはあたかも絶対的な一つの正解や真実があるかのような、AI 人間的思考への警告や反動と、私は個人的には捉えています。万人に共通し得る客観性を出す仕事は、むしろサイエンス系のアプローチの方が得意でしょう。そこではできない主観的な複雑なコンテキストの絡み合いや、その多様性を前提とするのが、今の人文科学系の学問には求められているというのは、自然の成り行きなのだと思います。この動きとも並行して、音楽史研究の中では、大作曲家の作品や個人を普遍化・英雄化・絶対視化する19世紀的な思想からの脱皮が行われてきました。

そんな時代の流れの中で、バッハの作品を受容の視点から多様に捉えたと、今の時代に合ったバッハ像を問うということも可能なのではないかと、そのようなことを考えていたところに、大村恵美子様・健二様ご夫妻共著の日本語歌詞『バッハ コラール・ハンドブック』(春秋社、2011年刊)に偶然にも出会ったのです。そして、この2023年11月、日本滞在時に幸運にも大村先生ご夫妻との対談が実現した際に、恵美子様が若き頃に留学されたフランス・シュトラスブルク(ストラズブル)が、20世紀初頭、A. シュヴァイツァーによるバッハ演奏復興の中心都市で、そこで現地の方たちが「母国語」でバッハを歌っていたというご経験がベースになっているということを伺いました。そのお話を大変興味深く伺いながら、その一方で、シュヴァイツァーのキリスト教観に基づくバッハ像が、日本では

月報 2024年2月号 CONTENTS

- ・今の時代に合ったバッハ像とは!?(園田順子) p. 1-3
- ・東京バッハ合唱団 2024年の活動計画 p. 3
- ・連載: 退屈するのはいいそがしい [36] (大野博人) p. 4

■写真(レイアウトも): 筆者



その当時あまり受け入れられなかった歴史について、日本のバッハ受容史の先行研究で読んだことがありましたので、これまで歩まれて来られたその道には、たくさんのご苦勞もあったのではと想像しています。

大村先生はその歴史のまさに渦中でバッハ普及に尽力されてこられたという、その脈略の全てが、先生の日本語歌詞の特徴にも顕著に現れているのではないのでしょうか。私は欧州スタンダードのバッハ・コレギウム・ジャパンのご活躍や、日本の優秀なバッハ学者らによるドイツのバッハ研究のご紹介や、原典に忠実な歌詞翻訳を目指した研究者らの背中を見て育ってきた世代です。したがって、今、書いてきたようなことが私の邪推でしたら、本当に申し訳ございません。

このような私の教育環境の背景もあって、大村先生ご夫妻の日本語歌詞を見た瞬間は、かなり衝撃を受けました（ポジティブな意味で）。そして、この日本語歌詞には、一つの国、民族や宗教に限定されず、キリスト教徒が大半を占めているわけではない日本のような文化にも合うような配慮や工夫が、意図的になされているのではないかと、気が付いてきました。なにしろ、例えば、ルターの死生観が最も顕著に現れたバッハのコラール〈平穏と喜びのうちに我は逝かん Mit Fried und Freud ich fahr dahin〉で、その信仰の核となる義認論に基づく言葉「神の意のままに In Gottes Willen」が省略されているわけですから！〔訳詞者註：音符と訳詞音節との対応が優先された結果です。下記対訳参照〕

Mit Fried und Freud ich fahr dahin	われは 去りゆく
In Gottes Willen;	安らかに
Getrost ist mir mein Herz und Sinn,	心 慰められ
Sanft und stille;	静けく
Wie Gott mir verheißten hat,	主 われに 告げぬ
Der Tod ist mein Schlaf worden.	死は 眠りとなれり

■大村恵美子訳詞「われは去りゆく 安らかに」(『バッハ コラール・ハンドブック』Nr. 92, p. 184)

ルター派の信者さんはそのままドイツ語で歌えばいい、そうではない方や違和感のある方は日本語で歌えばいい——そういう選択肢があることこそが、今の多様性を問う時代には合っているのではないかと私は個人的に思います。そして、こうした多様性への試みが、バッハの音楽を後世につなげていくための突破口の一つにもなるでしょう。

先ほど申し上げましたような音楽史観の転換が理由で、ドイツの音楽史研究でも、いわゆる大作曲家研究は縮小傾向にあり、バッハの町ワイマールですらバッハを教えられる音楽学者が音大に今いないという事態に陥ってしまっているのです。バッハを次世代にどうつなげていくのかは、これからますます顕著になってくるであろう、頭の痛い課題になると思います。

また、みんなに受け入れてもらいやすいバッハ像とは別に、これは当たり前のことですが、バッハの宗教曲が実際には、基本的にルター派後期正統派に属しており、そのオリジナルのドイツ語歌詞が、現在の一般的なキリスト教観や、移民の多い現代ドイツのリベラルな社会にそぐわなくなってきたというビターなバッハ像があるという共通認識も、少なくとも専門家は知っておいた方が良いのは言うまでもないでしょう。本場のドイツでも、実はその流れに沿って、様々なバッハ公演の試みや多様化が始まっています。

例えば、私がお手伝いさせていただいているバッハの故郷で毎春行われている音楽祭「テューリンゲン・バッハ週間」(*)では、2022年に『ET LUX: J.S. バッハのレクイエム』という公演がありました。レクイエムと聞いて、おそらくバッハに詳しい方には、これがバッハのオリジナル曲でないことはお気づきになれるでしょう。200 曲のバッハの教会カンタータから選んで、現代の社会にふさわしい歌詞を現代作家が書き足して、バッハの音楽を新しく作り替えた新曲です。

昨今のバッハ作品の改変例

「テューリンゲン・バッハ週間」
2022年プログラム表紙



←プログラム公演紹介

Erica Berlin
„ET LUX“
Ein Requiem von Johann Sebastian Bach

—バッハの楽曲に基づく新作
—約200曲のバッハ教会カンタータより曲を選出
—現代作家トーマス・クンストが詩を書き換える

これはキリスト教という一つの宗教を超越した、もっとより一般的なスピリチュアルな意味合いを Bach の音楽に持たせようとする試みです。この公演はその後、他のドイツの町や、その翌年の 2023 年にはライブツィヒのバッハフェストでも取り上げられました。ちなみに、この公演の詳細については音楽祭動画配信サイト (**)(一部、期間限定で無料。バッハの故郷で開催中の3つのバッハ音楽祭の紹介)からもご覧いただけます。

*) <https://www.thueringer-bachwochen.de/ja/>

***) <https://www.bachfromhome.live/concert/eroica-berlin>

そして2024年の「テューリングン・バッハ週間」音楽祭では、若手作曲家の中で、現代史上最も成功していると言えるでしょう、キャロライン・ショー Caroline Shaw と実力派古楽アンサンブル Vox Luminis とのコラボ企画で、バッハのカンタータをベースに、現代社会にふさわしい作品を1週間以内で書き上げて演奏するという挑戦的な公演も予定されています。

<https://www.thueringer-bachwochen.de/en/events/2024/v50-vox-luminis-caroline-shaw/>

「テューリングン・バッハ週間」音楽祭については、私もブログでご紹介しておりますので、こちらのサイトもよろしければ合わせてご覧ください。

https://note.com/sonoda_junko/n/nb8212958736a

☆

長くなりましたが、ここで最後に申し上げたいことは、大村恵美子先生が60年前から取り組んで来られた、日本語歌詞を通して普遍的なバッハ像を目指す道というのは、実は本場ドイツが現在向き合っている新しいバッハ像への挑戦の動きにも通じるものがあると思います。

現代に合ったバッハ像とは何か、そのことについて考えることから逃れられない、真剣に向き合わなければならない大転換期に、今、バッハ受容は、差し掛かっていると思います。

(2023年12月28日、ワイマールにて)

HP: <https://www.junkosonoda.com/>



■富士と落日(撮影:千葉光雄・団員、右上の写真も)
2023/12/10、荒川土手)



■メタセコイアの紅葉(2023/12/03、さいたま市別所沼公園)

2024年の活動計画

●特別演奏会(都内2会場)予定

- ① 6月8日(土) 日本キリスト教団・荻窪教会
 - ② 6月15日(土) 日本キリスト教団・三崎町教会
- いずれも、午後2時開演、入場無料

<曲目>

●松尾茂春 作詞/作曲《キラキラ星変奏曲》初演

(東京バッハ合唱団のベテラン団員による渾身の大作。1230小節・約70分、独唱/合唱4声部・オーケストラ・オルガン。周知の童謡をコラールに見立てて主旋律とし、キリストの生誕から受難・復活までの生涯を、明快な歌詞と1+40の変奏とで仕上げました。中世・バロックから現代にいたるさまざまな作曲技法を駆使しつつも、幸福な統一感に包まれた掛け値なしの傑作です。年明けから練習が本格化しています。団が自信をもってお届けします。今から期待してお待ちください)

●カンタータ第6番《とどまれ 我らと》(BWV 6)

(ご存じ、名曲中の名曲カンタータ。上記作品が「復活」で大団円を迎えた感動を受けて、その夕方の郊外エマオ途上での一幕。大村恵美子訳詞)

<演奏>

指揮:松尾茂春(自作品)、大村恵美子(バッハ曲)
オーケストラ:管弦楽団ARS(コレギウム・ハルモニア・スペリオール・ジャパン)、オルガン:田尻明葉
独唱:若手声楽家交渉中、合唱:東京バッハ合唱団

●第123回定期演奏会

<時期>10月末から11月(調整中)

<会場>上記2教会(荻窪教会/三崎町教会)予定

<曲目>

- カンタータ第34番《おお永遠の火よ おお愛の源よ》
- カンタータ第23番《主なる神 ダビデの子》
- マニフィカト 二長調 (BWV 243)

●その他 今夏8月ごろに、コロナ禍以降4年ぶりとなる信州での演奏会を準備・企画しています。軽井沢追分教会、小布施町などからの打診があり、カンタータ6番やマニフィカトからの選曲を念頭に調整中です。夏のご予定のご参考に……。

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

翻訳とは？



安曇野閑人 大野 博人

“Eva!” He kissed her.

英語の小説の中のこの一文をどう訳すか。ちがいなんか出しようがないほど簡単なフレーズである。だが、動物研究者としても知られた作家の故・畑正憲氏は、大学のときの授業でこう訳してみせた。

「……エバ。彼はそう呼んで、見事にカールした髪を唇でたどり、白いうなじに口づけをした。おくれ毛がふっとそよぎ、体臭がほのかに匂った」(「ムツゴロウの結婚記」)

先生は、「よし、次！」とだけ言ったそうだ。迷訳である。しかし、小説の場面が彷彿としてくるような名訳でもある。先生も苦笑いするしかなかっただろう。

最近、人工知能(AI)の登場で、まもなく翻訳や通訳はいらなくなるのかどうか、よく話題にのぼる。ために、このフレーズをネットの自動翻訳サイトに入力してみた。

「エヴァ！」彼は彼女にキスをした。」

味も素っ気もない訳がかえってきた [下掲写真]。

前回の小欄でお知らせした漫画についてのシンポジウムでも、AIによる翻訳が話題のひとつになった。

登壇したのは、日本の漫画を自国の読者向けに翻訳したり編集したりしている3人のフランス人。日本語の擬態語をフランス語に言い換えるときの苦労、日本人の新人漫画家を発掘して、先にフランスでデビューさせるという新しい動きなど、興味深い話が続き、司会をしながら感心していた。中でも、漫画の仕事をしていない私にも人ごととは思えなかったのがAIの影響だ。

これは漫画だけの話ではない。あらゆるテキストについて翻訳者の存在意義が問われる。私自身は翻訳を専門にしていたわけではないけれど、英語や仏語で取材したことを日本語の原稿にするという作業を繰り返

してきた。

たしかに、ネット上でも簡単に自動翻訳を使える時代だ。もう外国語を学ぶ苦労など不要になったのだろうか。だとしたら、辞書を何冊もボロボロにしながら身に付けようとした努力は無駄だったのか。

登壇者の一人は、いずれ失業するかも、などと懸念を示しながらもこう話した。

「でも、人を感動させる言葉にするのはAIには無理なのでは」

その通りだと思った。原作が画や台詞で醸し出している勢い、そこはかとない雰囲気などは、言葉を正確に訳すのとはちがうことだ。日本語がその場面でもたらしめているリズムを、なるべくフランスの読者にも感じてもらうには、どんな言葉を使えばいいか。

自分の経験を思い出してみても、インタビューの言葉をただ翻訳する、というわけではなかった。取材相手の表情、大声で強調した言葉、つぶやいた言葉、飲み込みかけた言葉。それも読者に伝わる日本語にしようといつも締め切りまでジタバタしていた。

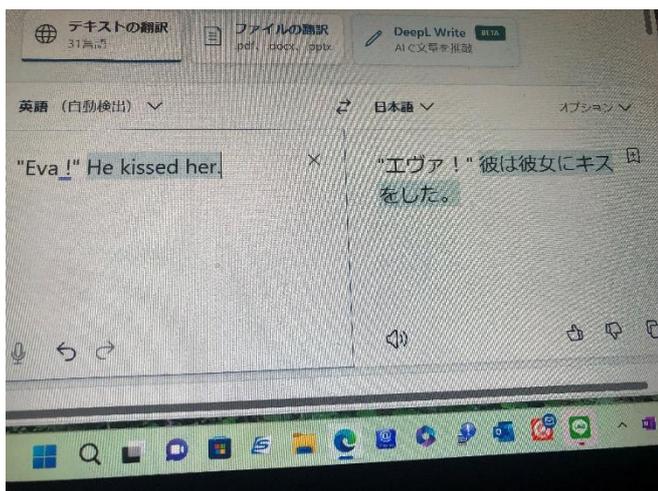
畑氏の迷訳にあって、自動翻訳にないのも結局同じことではないだろうか。畑氏は小説を読んで自分が想像した場面を伝えようとしたのかもしれないし、語学の教室の退屈な雰囲気をからかいたかったのかもしれない。いずれにしても、そのテキストが置かれている文脈や状況を巧みにとらえて、日本語にしているように見える。AIがどれほど語学的な精度を増しても、かなうまい。

人間が担当するかぎり、外国語はいったん翻訳や通訳をする人の心に入る。そして、そこから別の言葉になって出てくる。入り口と出口の間で、必ず人の心を通る。AIにも、たしかに入り口と出口はあるけれど、その間に心はあるだろうか。なにかを伝えたいという切実な思いは介在しているのだろうか。

そんなことを考えながら、あらためて大村恵美子先生が取り組んでこられたバッハのカンタータの邦訳を思った。

信仰心やバッハへの敬愛とは無縁のAIがやっただといたら、一番大切なことが抜け落ちるだろう。心を通らない翻訳は、人の心に届かない。

(筆者：団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■オンライン翻訳サイトの仕事ぶり。正確と云えば正確だけど……
(写真提供、説明とも：筆者)

[編集後記]

当ページに空きができて、久しぶりに「後記」を認めます。

今月号は期せずして、お二方が主宰者のバッハ訳業に言及してくださいました。先週、上掲の閑人氏がシンポジウム『「まんが」にのってのフランス』の司会をつとめられたので見学させていただいた(日仏会館)。日本漫画の仏訳の話題で、彼我の言語の構造、語順のちがいなどから、画と台詞吹き出しの位置のずれに苦労する、といった発言がありました。でしょうね。

原語歌詞でのキーワードの割愛に驚かれたという園田氏の巻頭稿に、訳詞者が注を施しています(当紙2ページ左段25行)。日本語は音節数が多く、音符に置かれる語数が限られます。音楽の流れ具合に気を配りつつ、どの語を残し、どの概念を捨てるか、これは訳詞者の思想に関わる、ということか？(K)